

演劇で

〈私〉として話す場を提供できるか



劇団衛星
俳優／ワークショップコーディネーター
／ファシリテーター
F・ジャパン 氏



一般社団法人ボランティア・
市民活動センター支援機構おおさか代表理事
「ふくしと教育の実践研究所 SOLA」主宰
新崎国広先生

社会福祉士で、これまで大阪教育大学などで教鞭を取られていた新崎国広先生と、劇団衛星の俳優で数々の学校で演劇ワークショップのコーディネーター、ファシリテーターを務めているF・ジャパンさんのお二人に「演劇で〈私〉として話す場を提供できるか」というテーマで、教育現場における演劇の活用についてお話をさせていただきました。

▶ 演劇、そして教育との出会い

FJ 僕は大学4年生のときに関西で配っているフリーペーパーで連載してたんです。そこに劇団衛星の代表の運行さんも連載をしていて、そのフリーペーパーの打ち上げで運行さんと出会ったんです。その帰りの電車の中で話してるうちに、劇団衛星のイベントがあると聞いて、なんか話の流れで出演することになって、そこから入っていった感じですか？

新崎 それまで演劇はやってはったんですか？

FJ 演劇は全くやってなくて、バンドでパフォーマンスはしていたので、劇団でも「次うちのイベントに出ないか」みたいな話になった。そのイベントの打ち上げで「次の公演も出る？」みたいな感じになって。なのでなんか、「今日から俺は演劇をやるんだ」みたいな感じじゃなくて。

新崎 表現することが楽しいみたいなの？

FJ いや、なんか褒められて嬉しかったみたいなの。本当に完全なる思い出作りで、その覚悟のなさがF・ジャパンっていう芸名に表れてるかなと思います。明日から俺はF・ジャパンだと、志高くつけたわけじゃなくて(笑)ちょっと1回出るぐらいだったら、と思って20年やってしまった。そんな感じです。

新崎 僕も喋っていいですか。ちょっと長くなりますけど。

FJ もちろんです。

新崎 僕は、昭和30年に生まれたんですけどね。その当時、沖縄は戦争っていうことがあって、若い方々は多分ご存知ないと思うんですけど、アメリカの領地で、在日沖縄人は、在日コリアとか、在日アイヌ人とか被差別部落とか、そういうふうな差別の対象でもあったんですよ。僕はすごく勇気がなくて、それで自分が沖縄出身だということを大学に入るまで隠してきたんですね。

それは、例えば叔母の結婚問題が急に中止になるとかで、聞くとは無しに子供なりに、自分がすごく悪い人間というか、そういうふう思ったときに、自分の個性を出さないでおこうと思った。だから本当に好きな人ができて好きって言えなかったし、そんなないけど好きと人から言われても、もういい加減に逃げて、ごまかして「友達だよ」言っても。そんな自分がすごく嫌で、それで高校のときに映画を見た時に、「そうか、自分のことを隠して生きるには、演劇というか、〈役〉になることや」って思って。

高校に行っても、友達はできるけどやっぱり深くならないなと思ったときに「もう高校卒業しても大学いかんと演劇やろう」と思って、東京の某劇団に文通して、受験するところまで行ったん

ですけど、1回目の通知がお袋に見つかって、一人っ子やったんで、反対されて、「とにかく大学だけは行ってくれ」と。「それやったらしゃあないかな」と思って大学に行ったんだけど進路を選ぶときに、福祉の道に行ったんです。

それもすごく不純な動機で、福祉って、障害者の人、生活困窮の人、それからアルコール依存症の人とか、いろんな社会的に弱い立場の人のことを勉強できるじゃないですか。演技にも使えると思ってね。それで学部は社会福祉学部だったけど、演劇部に入って、全然授業にも出ないでずっと演劇をやってたんです。

そういうことをしているうちに、大学の2年生のときに、好きな子と、夏休みに一緒にアルバイトをしようって、おもちゃ売り場で店頭販売をやってたんですよ。そしたら振られてしまって、地獄じゃないですか(笑)お金のためと言っても、2ヶ月間も振られた子と店頭販売をやる自分がすごく嫌で、それでおじさんが沖縄で児童相談所の職員だったんで、無理に頼んで、60日間泊めてもらったんですよ。

するとね、そこで出会った子供たちが、こんな言ったらすごく偏見かもしれないし、怒られるかもしれないけど、演劇よりドラマティックやったんです。中学生で性的虐待を受けてたり、親が1人親家庭で貧困だと言うだけで、先生から「物をとったやろ」って決めつけられて非行になってるとか。そんな子供たちと出会うと、僕が演劇を通して伝えたいことよりも、福祉でその子と対峙して、関わることの方がドラマティックやなと思って、それで障害児のワーカーになったんです。

だから、演劇との出会いっていうのは、真っ当ではなくて、自分自身がまずは逃げるため。でも自分の気持ちを表現するためにはすごく勉強になった。今はそういった表現を使って、いろんな生きづらさを抱えている人たちを応援する一つのテクニックとして考えてるんです。今日のテーマは教育と演劇だけど、僕は対人援助と演劇みたいなところで興味を持ってきたということです。

FJ ……全然僕と関わり方というか志が違うな(笑)

新崎 いや志って全然(笑)僕は演劇っていう本道とは離れてるけど、演劇の何か大切な部分、表現するとか、相手の反応を受け止めるとか、そういうところって、何かいろんなことの場面に使えるなって思う。

▶ 〈私〉として話すとは？

FJ ちょっと順序立てて言えないかと思うんですけど。

新崎 大丈夫(笑)

FJ 自分の思うことを言える人と言えない人がいると思うんですけど、僕はどちらかというと言えない。演劇の稽古場とかで演出家の人に「どう思う？」って聞かれたときに答えに窮する。「どう思う？」って言われたときのアンサーとしては、思ってることを言うということだと思うんですけど。思ってることを言えない。「何て言ったら〈いいね〉になるのかな」と考えてしまってる。

新崎 いいねってというのは周りの人がっていうこと？それとも自分がってこと？

FJ 質問した人がですね。稽古場においては演出家。「評価が上がるような答えて何やらな」っていうふうに自然と思っただ。自分が何か思ってたとしても、それは言えないという瞬間に「なんも感じないのか」って評価が下ると思うと「そうですね」といった方がいいかな、とそういうタイプだったんですよ。ずっと僕はそういう「性格」だと思ってたんです。で、学校ワークショップとかをやっている、特に道德教材教材を扱って学校の先生と、授業作りをし始めたときに、これは性格じゃないとだんだんわかってきたんです。

道德の授業で特に先生方が苦労してるのが、内容項目について子供たちが思ってることを言い合う授業にしたいけどそうならないこと。僕も例えば演劇で環境問題をテーマに子供たちと一緒に台本作りをするときに、子供たちが環境問題について習ったことは、簡単に聞き取れる。でも、環境問題についてどう思ってるかっていうのはやっぱり聞き取るのが難しい。

ポジティブな意見はまだ聞き取れるんです。「なくしたい」とか「許せない」みたいな。でも「あまりピンと来ないな」とか「別にどっちでもいいと思ってます」みたいなことは、当然、教室の場で言えない。「許せない」が本心の子もいるけど「そういうことを言うべきだ」みたいな子もいると思うんです。

新崎 道德の時間って評価のいる科目になっちゃったじゃないですか。そして今、FJさんが言っていたみたいに、自分が「別に環境なんてどうだっていいじゃん」っていう意見を表現したときに、先生方がそれをマイナスって取るなら、かしい子は絶対そう言いませんよね。

FJ はい。僕がすごい難しいなと思ったのはその道德で、素直な心みたいなテーマがあって「素直な心で、言った方がいいよね」と話をしているときに、子供が多分4時間目だったんで、素直に「お腹空いた」って言ったんです。そしたら先生にめちゃくちゃ怒られてたんですよ。「今そんな話する時じゃないでしょ、この子が意見言ってるでしょ」みたいな。

新崎 その時子供らって、先生に対しての信頼感をなくして絶望するよね。

FJ 子供を見てると、思ってることを言うと、多分学校の教室というオフィシャルな場であれば、9割ぐらい否定されるんじゃないかなと思う。他の事を思っても怒られるし、求められてる外のことと言うと「今は関係ない」って言われたり。

先生が誰かの意見を「それいいね」と言ってるのをみて「そういう意見を言うべきなんやな」みたいに、ますます自分の思ってることが言えない。それを見ていて、もしかしたら、自分もそれに染まってたんじゃなかなと思った。自分がお芝居するときも、僕は演出家の人が喜ぶような芝居をするべきだと思っただ。

新崎 演出家が先生で、立場で言うと、自分が生徒みたいな？

FJ 先生というか、お客さんを演出家っていうふうに具体的にした方が自分としてはわかりやすかった。だからその演出家の人が喜ぶようなことをやるべきだと思ってたんです。

でもそうじゃなくて、演劇でいうと、自分は作品のために芝居するべきなんやなって。演出家が言ってることと自分のやりたいことが違うのが当然で、演出家が言ってることを聞いて「演出家さんは作品に対してそういうふうに思ってるんねん」っていうのを、自分は作品に込めて作品に向かって示すべきだと思うと、考え方が変わってきて、稽古場に行くまでの準備段階が、豊かなものになった。そうすると、当然あんまり褒められることがなくなって、違うって言われることが多くなっていったんですけど（笑）

新崎 でも演出家からは使われるわけでしょ？

FJ いや、うまくいってるかどうかは分からない。ただ自分の中の充実度だけの話で。

新崎 ちょっとだけ聞いていい？

そもそも、F・ジャパンさんが、演劇と教育とか学校の中での授業に、行こうと思ったきっかけって何かあるんですか。

FJ 学校でのワークショップは劇団衛星がやってたから、僕もずっとやってた。子供たちとワークショップすることは楽しかったですね。最初はもっと演劇の面白いところ、演劇の楽しいところを子供たちに体験してほしい。それがいろいろな教育効果にいいはずと思ってやってた。

当時僕自身は教育のことについてそこまで真剣に考えてなかったんだと思います。自分が教育ということを考えるようになったのは先生と授業作りをするようになってからです。授業作りをするまでは、自分は演劇の専門家なんで、学校の先生は専門家として迎え入れてくれて「演劇の人ありがとうございます。子供たちが演劇してとても楽しそうでした」みたいな、それだけのお付き合いだったんです。

でも先生と授業作りをすると、当然先生は授業の責任を持って「こうしたい」「こうならなければいけない」「こうじゃないと評価できない」ということがあって。

そのときに当たり前なんですけど「授業って、学習の目的を達成するためにすねん」「学習効果みたいなことを考えなきゃいけないんだ」というふうに思った。

でもやっぱり「演劇をしたら、〇〇力が上昇する」みたいなことを、どうしても自分は言えない。言えないっていうのは、そう思っていないことだと思うんですけど、でも学習効果というか、やる意義はあるという確信はあるんですね。それで、演劇をやるべきだということを受得させるために「〇〇力が上がりますよ」ということを自分の言葉で言えなくてしんどいことがあったんですけど、そこで道德っていうのに出会ったんです。

いい意見、悪い意見ではなくて、自分がどう思ってるかを、表明するって、難しい。

新崎 勇気がいるしね。

FJ はい。でもそれに触れると、感動がある。

演劇は、フィクションで嘘を前提として成り立ってる。でも、完全な嘘じゃなくて、現実と紐づいてる中のあるところなので、そういう場を利用すれば、例えば環境問題についてピンときてないことを表明するために、環境問題についてあんまりピンときてない役を作ると、その役の心情を、想像し、セリフにすることができるとし、その役で環境問題に取り組んでる人の話を聞くことができる。

これを一昔前は、環境問題にピンときていない役を「すいません。私は自分とは関係ないと思ってました。これからは当事者として生きていきます」みたいに謝らせていた。そういう展開も生きていると思うんですけど、それよりはその役で想像しその世界に立つっていうことが必要だと思うようになった。そうじゃない限り、現実の世界では環境問題にピンと来てないと思ってたとしても言えないし「環境問題について当事者性を持っている」とごまかして生き続ける事になる。演劇の世界では当事者性を持っていない自分のままでいる事ができるのはいいなと。

演劇を使うことで、オフィシャルな学校現場で、自分の思ってることを言うっていうことを子供たちにやってほしいと思う。自分が思っていることを言うという事は、考えないといけない。考えると起こった結果に対して反省できるようになると思う。

新崎 責任も持つしね。

FJ そうですね。あとは傷つく事ができる。

新崎 傷つくね。

僕はね、教育大学の教員してていいかどうか分からんけど、教育嫌いやったんです。なんで福祉に行っちゃっていうと、僕が小学校・中学校の時に経験した先生方ってやっぱり知識を教えたいていうところが結構あって、できんできひんとかっていう相対的な見方をしてる中で、もちろんすごい素敵な先生もいたけど、何か教育に対してすごい違和感があった。

福祉の仕事についたら、特別支援教育とかの先生方ってその子の成長とか発達っていうのにすごく焦点を当てる。そんなときにFJさんが言ってくれた当事者性っていう部分、「僕は障害のある〇〇くんとは違うけど、同じクラスやん」っていう、そういう関係性を作るためには、何か今までの教え授ける教育では、かえって生徒たちをディスパワーすると思う。

つまり「ここまで知らないの？」とか、「ここまでわかっただいいいよ」っていう評価をすることによって、どんどんディスパワーされる。だから課題提起型教育って言って、さっきFJさんが言ってたように、演劇の中ですごい嫌やったとか気持ち悪かったとか、そういうことを表現する中で、「これは何の課題なんやろか」って考える、そういうことができていたらいいなと思う。

課題提起型の教育を考える中で、今までの教育の評価とか相対性とか、そういうところにちょっとアンチテーゼが言いたいなと思って福祉から教育に移ることになった。だから演劇も面白いなと思うんです。

▶ 先生が教室で〈私〉でいることの難しさ

新崎 さっき「今、ご飯ちゃんやでしょ」って言われるという話があったけど、今、子供の貧困というところで言うと、朝ご飯抜きで来てる子がやっぱり1時間目にお腹減ったって言うわけよ。そんなときに先生が自分の価値観で「食事は4時間目ですよ。済んでからでしょ」って言ってしまったために、もう子供たちは自分の気持ちをそこで押し止めたあかんってなったり。

今も1時間目から爆睡する子がいる。それを「何で寝てるねん」って怒る先生なのか、ちょっと配慮するか、そこが演劇なんですよ。「なんで寝てるんかな？」「夜寝てないんかな」「家の手伝いをしていたのかな？」とか、配慮しながらの関わり方と、「寝たらあかんやろ」っていう教師の価値観だけで怒るのとは、子供たちの成長とか違うんじゃないかなと思う。

例えば障害の重い子がいたら、クラスの中でね、その子と子供たちの関係性っていうのを作る。それは芝居・演劇とは違うかもしれないけど、関係性を作るってすごいドラマティックだと思うんだけど、そういうことができる先生と、「今日は〇〇くんがいる

から、ごめんね、ちょっと自習にしといてね」っていう先生とでは、多分子供たちが受ける学びというか影響って違うなって思う。

だから、何かいろんな先生方の視点を広げたい。それが演劇かどうか僕はわからなくてしなかったけど、そんなときにFJさんたちが来てくれて演劇の授業をやってくれて「これや」と思って。

FJ 学校に行ったときに、先生と僕ら演劇講師が、決定的に異なってる点は、先生は、児童生徒を個別に評価しなきゃいけないって、しかもその評価を、本人や保護者の方に報告する義務がある。その責任が僕たちには全くないから、評価を手放して、個性を認められる。でも先生は多分、達成するべき態度みたいなものがあるって、そこに対し評価をしないとイケない。

新崎 先生とワークショップとかやるときって、先生方ってそれをジレンマに感じてる？

FJ 感じてると思いませんね。

新崎 それはそういう先生って素敵ですよ。

FJ やっぱり先生って個別に1人1人評価しなきゃいけないから、当然僕は僕として子供たちに接することができるんですけど、先生がなんというか自分の固有な名詞で彼らを評価するということは、多分、とってもしんどいことだと思う。

新崎 しんどかったよ。今は絶対評価も増えてるかもしれないけど、相対的に見ないとイケないから。だから、僕は否定的に先生のことを語ったけど、そういう意味で言うと先生が教育っていう学校の枠組みの中だけで子供たちを教えるってことしんどさはすごくある。

FJ そうですね。やっぱり、教室で特に授業中に先生も自分が思ってることは言えないと思うんです。先生として言うっていうことがやっぱ基本としてあって。

道徳の時間で言うと、教科書読んで「気持ち悪い読み物やなと思った」とはやっぱりいえない(笑)子供たちの前だと特に。やっぱり先生としての発言しなきゃいけないっていうのがあるって、やっぱり難しいと思う。一方で社会ってそういうふうになり立ってる面もあるから、そういうところで子供たちの安全を管理し、皆に平等な教育を与えるためには、そういう制度がいいんやろうなと思ってる。

だから先生が変わるといよりも、学校にいろんなカルチャーが入った方がいい。今はいろんなカルチャーを先生がやれと言われていて、ある面では評価者であり、達成度を求められ、ある面では、固有な名詞として子供らに接しろって言われても、それはすごい矛盾やなというふうになる。

僕は学校に行くとき読み物を読んだときに「この人物、ちょっと俺許されへんねんけど」みたいなことを言うことができるんですよ。そういうことが学校で先生以外の大人が言うっていうことが、大切やと思う。

新崎 同感です。エンゲストロームっていう社会学者が、「今の学校教育はカプセル化している」。つまり、今FJジャパンさんが言ってくれたみたいに、先生が、受け入れる役もせなあかんし、教え込む役もせなあかんし、時には怒らないとイケない。全部やっているっていうところ。

それは日本の学校教育のいいところかもしれんけど、でもやっぱり今もこれだけいろいろなしんどさ抱えてる子らがいるときに、役割分担として「こういう大人もういるんやな」「しっかり聞いてくれる大人もいるな」「怒ってくれる大人もいるんやな」っていう、いろんな大人っていうか他者と出会えるところがね、今の子供たちってないなと思う。

古い話やけど、僕らが昭和30年、戦後10年生まれで、いっぱい怒られたし地域の人から。いろんな他者がいて、それを自分の中で「あんな大人にならんとこう」とか、「あんなお兄ちゃんなりたいな」っていうロールモデルができた。今はそういうのがすごくなくなって、学校の中で、FJさんが言ったみたいに、全部やらあかん、疑似体験せなあかんと思ってるどころになんかしんどさがあるんかなって思う。



FJ あとは、教育っていう言葉を言い換えると、いろんな言葉に言い換えられると思うんですけど、それこそ悪い言葉でいくと、抑圧とか洗脳とかあるんですけど、「影響」っていうふうにも言い換えられると思う。

知識を伝達するっていうのも影響を与える手段の一つだし、教育は影響与えることができるんだなというふうに思ってる。他者を変容させることはできないけど、影響与えることができるなと思ってる。その影響が直接「個人」に行くと危険で、影響は「場」に与えるべきなんじゃないかなというふうになる。

新崎 「場」っていうのは、クラスとか地域とかそういう？

FJ そうですね空間というか、参加者がいる「場」ですね。

▶ 演劇的手法の魅力とは？

新崎 僕、ずっとこだわってるのがね、「わかるか？」とか「わかってますか？」っていう言葉は絶対使わんとこうと思ってる。友達同士だったら「わかる？」とか「わかってよ」って言う。僕も施設ワーカーをやった時は「わかって」って言った。でも教師と生徒の関係では「これわかりますか？」って、言うのと受け手側にしたら「お前こんなこともわからないのか」みたいな上からの感じで喋ってるんやろなって思った。教員と生徒って対等性はない。「見えない権威」っていうのに気をつけないとイケないってずっと思ってた。

だから「伝わってますか」の新崎ってあだ名をつけられるんですけど(笑)

伝わるってあるじゃないですか。芝居だってそうで、学校の先生と違う人たちで、演劇やって変なおっさんが来てさ、「こんな生き方もろいな」っていうので、そこで伝わったことが、「先生はこう言うてるけど、この価値観の方が僕なんかフィットするな」みたいな経験をいっぱいすることがね、子供らにとったら学びやなというふうになる。

だから、FJさんがやったジェスチャーゲームが面白いと思うんです。やり方どうやっけ？

FJ 言葉を使わずにゴリラとか、お題を動きで伝えていく。だんだん動きが変わっていく感じ。

このゲームでやりたいこととしては、やった動きを、見た人が受け取り、次の人に伝えようとする時に、ほぼ100%コピーすることなくて、その人なりに伝えようとする。伝え方にその人の意思が出るんです。その違いがすごい面白い。だから答えが合ってる合っていないは別にどっちでもいい。伝え方・解釈の仕方が異なると、伝えたことが伝わらない、見てほしいとこじゃないとこ見てみたいなのとかが面白い。それをお客さんが見て、面白くなっていうふうになってほしい。

でもこのゲームを最初にやり始めたときに、黒板にゴリラって書いて、最後の何に見えたか答えてもらおうんですけど、最後の人を当てるときに「さあ、正解は？」と言ってたんですね。それで答えてもらって「惜しい！」とか「ちゃんと伝わってるね」とか言うって、やっぱりなんていうか、私が出したお題をいかに最後に伝えるかの構造になる。

でもそれとさっき言った目的とはちょっと違う。なので「正解は？」じゃなくて「何に見えた？」と聞くようになったんです。聞き方の問題ですけど「何に見えた？」だと「お題何かな」っていう思考じゃなくて「今その動きが何に見えたか」っていうことを答える構造にできる。だから、そんなわけないか言うんです。「タオルを思いっきり頭の前で振ってる」みたいな。僕は黒板にはそんなこと書くわけない。何に見えたかを言ってくれるんだな。

そこから「正解は実はゴリラでした」じゃなくて、「僕が書いたのはゴリラでした」と、僕が書いたのはゴリラやっただけ、最終的にタオルを頭で振るように見えたんやな。それにはこういう変遷があったんやな、なんでそうなったんやろ。ここでこういうふうを受け取ったんやな、面白いなという感じ。

でも「正解はゴリラです。答えは何？」やと、ここでしゃがんだから正解と間違っただなみたいなふうな構造になる。そうじゃない方が自分のやりたい演劇に近いなという。

新崎 これが、すごい面白くてね、今おっしゃった通りなんです。教育って、答えの落としどころを求めてやらしていく。それもちろん大事なことだけど、一方で「そういう考え方もあっていいよ」とか「相手との関係性の中でそう思うよ」とか。そこに今先生方のすごいジレンマがあって、F・ジャパンさんとか、演劇っていう違う物が入ってくることで、教育の今の難しさとか課題に一石を投じるのかなと思う。

FJ ありがとうございます。ただ本当に「演劇が優れてる」わけじゃなくて「演劇もある」ってことなんです。だから別に先生方がやってくれることよりも、演劇教育の方が子供たちが自由になれるっていうわけでは全然ないと思うんです。ただ、演劇的な考え方もあるし、それを体験するっていうことはとってもいいこと。

▶ 先生と演劇人が協働することの面白さ

新崎 価値観が違う大人が、一緒に授業を作るっていうプロセスの中に、ドラマとか演劇があって、それを表現する舞台が授業やったりすると思う。それで解釈間違ってますか？

FJ はい、そうだと思います。

新崎 そのプロセスがすごく面白くて先生方にとって、めっちゃ学びになっているし、FJさんも教員と出会うことで、「ちょっとこの先生とは違うな」とか「この先生とはすごい共感できるな」とか、その瞬間瞬間の学びって、すごい意味あるなって思う。

FJ それ本当に、めっちゃくちゃ大きいです。本当に恵まれてるなと思うのは、ふつう俳優が自分の演劇の価値観を語る相手って、おそらく演劇関係者の人だと思うんです。もしくは喋れないと思うんです。劇団とかで言うのはすごい難しいだろうな。自分もそんなこと言ったことないし、その話自体にならないかも。

新崎 例えば、所属されている劇団衛星が学校やとしたらFJさんは、その学校の求めるミッションと違うことを言ってもいいの？
FJ ちょっと難しいですけど、ただ「思う」ということを止めないようにはしています。それをアウトプットするかどうかはわかりませんけど。

新崎 「ちょっと違うな」とか、「ここは共感できるな」みたいなことは思うってこと？

FJ そうです。例えば「代表が言っていることと違うことを自分は思ってる。間違ってたな。そういう考えにならなければ」みたいなふうの前までは思ったりしてたし、思えなくて苦しんだりしてた。

でもそうではなくて「そういうふうには思ってるんや、俺は全然違うな」と。それで「言われていることを自分なりに、相手も納得するような形でアウトプットする方法ってないかな」と考えるようになって。先生も、こんな風に自分の教育感を先生として話す機会って、おそらくないんじゃないかなと思うんです。

新崎 僕ごめん、ちょっと今の学校教育現場は分からないけど、忙しければ忙しいほどないような気がする。

FJ はい。僕が授業の打ち合わせに行くと、対立するんですよ、やっぱり違うから。それが僕は、貴重な時間だと思って。

新崎 そう思ってくれる先生は繋がるんだねきっと。

FJ はい。もちろんうざいと思うんですけど、そのときにやっぱり自分がやりたいかとか、教育のことも考えます。だからそういう場で自分が演劇に対してどういうふうには思ってるかを、演劇をやってない教員の方にだから言えるし、それを鏡にして考えられるすごい貴重な場をいただいているなって。

新崎 多分僕らもそうやけど、何か異なる考え方とか価値観の人と出会うって邪魔くさいし、大変やけど、そういうときの話って、後で学びになったりする。だから今、地域とともにある学校とか、開かれた学校って言って、先生だけじゃなくて、地域の人たちも巻き込んで、子供たちの教育をするって、文科省は言ってる。演劇を通して、地域のおっちゃんおばちゃんとかと話し合ったりをやっていく中で、先生も自分のスキルを伸ばしていくっていうふうなのがあっていいんかな。それができない忙しさはもちろんあんねんけど。

▶ 大人の演劇ワークショップのカギは「雑談」

FJ 僕は雑談が好きなんです。

新崎 一緒です。

FJ 「なにか好きな食べ物を聞く」とか「昨日何してた?」とか「3000円あったら何に使うか」みたいな、そういう雑談から垣間見えるその人っぽさみたいなのを話したり、話を聞くのが好きで、演劇ワークショップもそれに近いものがあるなと思ってるんです。やっぱり知らない人同士、大人が集まって「今から雑談2時間しましょう」ってできないけど、演劇ワークショップはその雑談に近いものがあるなというふうには思っています。

新崎 具体的にどんなことをするんですか？

FJ ゲームですね。シアターゲームみたいな。ワンワードで話を繋いでいくワークもありますし、それこそジェスチャーゲームをやったり、色々なゲームをしていくとその人なりの伝え方みたいなものとか、受け取り方、一方で受け取れないものみたいなこととかがその場で了解されていく。すごく雑談が盛り上がっている雰囲気に近いものがあるって、それが有意義な時間だなと思います。

新崎 別に話の内容を合わせたわけじゃないですよ。でもね僕も必ず大切なのは「雑談」って言ってるんです。

福祉でいうと、引きこもりの若い人らと僕、仕事でお話して、別にカウンセリングじゃなくて、ゲームしたりするんです。自分SOSとか、しんどい状況に気づいてない人に、「何かお困りなことありませんか」って言っても、自分が困っていることにすら気づいてない人もいる。その人に自分の困ってることとか生きづらさを表出してもらうためには、雑談ってすごい大事。

そういう関りが大事と思う中で、前に僕が大学にいたとき、院生さんが特別支援学校の先生で「それを演劇でやりたい」って言って、演劇ワークショップみたいなのを自分たちでやってたんです。

その取り組みで良いなと思ったのは、先生とかは演劇で「うまくできたかどうか」っていうことを、評価をしがちだけど、その院生さんは、その人がいかに楽しかったとか、いかに自分なりの表現ができてるかみたいなところにこだわっていた。ただしそれをやると、評価ということとは難しいとも思う。そもそも雑談ってめっちゃめっちゃ難しくないですか？

FJ いや難しいです、本当に。

新崎 なんでだと思います？

FJ やっぱり意味がないからだと思います。

新崎 意味もないし、例えば分かる、分からないだったら、想定した答えが返ってきたら「よし!」という感じだけど、雑談って全然想定してないことをみんな言う。そのときにこっち側はそれをどう受け止めていくか。例えば僕らのようなソーシャルワークでいうと、それを共感的にどう返していくかっていう、そこの心の葛藤が一番面白いんですよ。

演劇もそうじゃないですか。なんかこういう答えが出てたらいなくて思うときに、それとは違う方向に行ったときに、そこに対して驚く反応があったり、怒る反応があったり、そうかっていう反応がある。とてもダイナミックというかドラマティックというか、面白さがあるなというふうに思います。

FJ 本当にそうです。雑談だとそのダイナミックが難しいんですけど、演劇ワークショップだと色々なことを曖昧にできる。

例えば相手が言ったことに興味がなかったとしても、演劇のワークショップの中だと、雑談の時よりも曖昧にできるのを受け取れるし「興味があるふりをしなくちゃ」みたいなことは思わなくてもいいというか。そこはすごく楽です。



▶ 演劇を「やりたくない人」と演劇する

FJ 僕は、普段演劇ワークショップは基本的に演劇をやりたくない人とやってるんです。

新崎 それはどういうこと？

FJ 学校の演劇ワークショップもそうですし、大学の授業とか企業のものとか、呼んでくれた人はやりたいけど、呼ばれた人は「え?」みたいな人が多い。「演劇のことを教えてください」という人たちと演劇ワークショップをやる機会はあるしなかったですね。

新崎 いや、なにか嬉しいかって、ちょっと今僕がすごくジレンマがあるんです。ある団体が、引きこもりの若者が社会参加するためのスモールステップみたいなものを考えていきたいということで、なにか講演をやってくれて言うから、それは嫌だって言ったんですよ。

引きこもりとはなにかっていうのを、当事者の子供らがやっと家から出ようとしたときに、そんな説教みたいなことしたくないから。ワークショップとは言わないけど、グループワークでいろいろなことをやりたいって言って、やってたんですよ。

そしたらやっぱり彼らって今まで外に出ることができないから、「めっちゃ緊張する」とか「嫌だ」という反応があって。「割と喋りやすい人たちでした、また来たい」という意見もあるんだけど、次どんな展開にしていこうかなと今正直、悩んでいます。逆に言うと、そうやって表現のすごく苦手な人とか、自分で嫌だと思っている人に対して、FJさんはどんなふうになりますか？

FJ 僕は演劇をやることによって、誰かがなにか楽になるっていうことはあんまり考えてなくて、僕が演劇っていうツールを使うと、その人と「何か」できるんじゃないかなと思ってるんです。

新崎 ちょっとだけ偉そうなこと言ってもいいですか。僕らの信念で「人間には自分自身で幸せになりたいっていう欲求がある」というのがあって、それをワーカビリティとか自己問題解決力

って言うんですけどね。どれだけ落ち込んでも、幸せになりたいと思う気持ちがある。だから人間ってきっかけがあれば変わるなど思う。その「きっかけ」になりますよね。

FJ 表現が苦手な人がどうしたら表現ができるかっていうのは、難しいですね。その回答になるかどうかちょっと分からないですけど、学校WSで育成学級の子たちとワークショップすることがあって、一応内容が道徳の授業みたいなものだったんです。それで先生に「どういうふうにしましょうか」「目的はなににしましょうか」と相談したときに先生が「いろんな大人の人と遊んでほしい、それだけでいい」と言われたんです。

新崎 それはプラスの表現？それともただその時間遊んでっていい？

FJ いや、演劇を使って遊ぶということでした。育成学級の子たちって1人1人では楽しく遊べるけど、みんなで遊ぶことが難しいから、演劇でみんなで遊ぶっていうことができたらいいなという感じで言ってくれて。

僕も基本的にはそういうことかなと思っていて、その子が誰かと何かをやっている、例えば個別に参加しなくてもその場にいるでもいいと思うんですけど、その子が参加していると、なんせその子がいて、他の人たちがいて、その子と一緒ににかやっている。僕は演劇を使って、そういうふうにしてその場でその子と一緒に過ごせるように演劇をやっているんです。演劇という場で、例えばこっちの方を全然見なくて、角の方に座っているだけでも、参加してるっていうふうに演劇を使って、できる方法はないものかなということを考えています。

新崎 なるほど。いや、僕の反省なんですけどね、偉そうに言ってるんですけど、やっぱりそういうワークショップだと、よく喋ってもらえてよかったという自分の中の評価がある。

だから今FJさんが言ったように、そこにずっといてくれる、いてくれているというだけでもすごく表現になるのかなというふうに受け止めることっていうのも、有りだなと思いますね。

▶ ファシリテーターとしてどう〈場〉を作るか

FJ 当初出発点は、演劇の楽しいところを体験してほしいというところだったんです。ただ演劇ワークショップとしてはすごい楽しそうにしているけど、終わった後の振り返りの時間で「あそこが良かったよね」とか「君たちのこういうところがこういう影響を与えたんだよ」みたいな話をしているときの子供って大体目が死んでるんですよ。

そのときって大体「早くこの時間終わらないかな」という感じで僕たちを見ていることが多くて、そんな時にどれだけこちらが話をしてもしょうがないんだなというふうに思んです。やっぱり自分が良いことを言おうとするときは、やっぱり「与えたい」と思っているときだな。

そういうのって大体求められていないし、子供たちは話した内容を覚えていない。なにか楽しかった思い出とか、覚えているのはそこまでのことが多くて。逆に話した内容を鮮明に覚えているというのは、何か抑圧がひどかったかなとも思ってしまう。

新崎 今FJさんが言っていたみたいに、生徒が話を聞いてないことって分かるじゃないですか。逆にそういうことを意識せずに熱く語れる人ってすごく羨ましいなっていう気がします。気づいてしまうから、なにも伝えられなくなったりしますよね。

FJ だからもう、いろいろ諦めたというか(笑)結局自分がその場でどういうふうに進めたいか信用できないというか。僕は年間を通してその子たちと付き合うわけじゃないから、たった1年のうちの多くて3回とか5回とかなので、その3回とか5回で何か与えようとするとしても無理が生じるから、やっぱりその子たちと一緒に何かやるしかないと思う。

演劇の世界でも演出家が俳優を教えようとするとき大体失敗するなど思っているんですよ。演出家は俳優と作品を作るべきだなと思うんです。作品を作る過程で作品のために何か指導があってもいいと思うんですけど、その個人を指導するのと作品を作るのは全く別の話。大体後輩を鍛えるための公演って面白くないしそれで育つなんてことないんじゃないかなって思うんです。

新崎 でも新人公演とかあるじゃないですか？

FJ 作品を作ることが、新人を育てることだとは思いますが、新人を育てる手段として、公演を作るということはあんまりよろしくないというか、それでは育たないというか、それは抑圧になると思うんです。

なので僕も子供の教育現場に行ったときに、児童生徒さんに教えるというよりは、先生が持っている目標課題を私は大人として、演劇という手段を使い、子供たちと一緒に私がそれを達成するぞ、という気持ちでやっているんです。

だから道徳の時間でも、例えば「誠実」という内容項目であれば「誠実について考えさせたい」じゃなくて「俺が誠実について子供たちと一緒に考えるぞ」と思えると思うとすごく充実した気持ちになります。

「子供たちに誠実について考えさせられなかったな」というのは、どうも自分が当事者性を失っているなと思います。評価者としているなって。そうすると、どんどん「俺そんな奴じゃないのに偉そうに」みたいなふうになっちゃうので、子供と先生と一緒に教室という場で〈私〉が誠実について考えるために演劇を使っているって感じですよ。

新崎 僕もファシリテーションというところで言うのと、よく似てるのかもしれないです。演劇じゃないかもしれないですけど、例えば、心のキャッチボールだと思うんですよ。空間で一緒に何かやりながら、お互いに繋がった、伝わっている関係作りができるっていうのが大切なことだと思います。

そのためには、あんまり僕が喋ったり、こういう価値観ですという話をするんじゃないで、まずは一旦、なんでもいいから話してみようとか、そういうことが大切だな。

そこから自分の想定した部分と違うところをどう受け止めて、それをポジティブにフィードバックしていくか、共有化していくかっていうプロセスが面白い。こんな授業が、年に1回でも2回でもできたら最高だなんて思うんですけど、伝わってます？

FJ はい。僕もファシリテーターって、その場で起こっていることに、どういうリアクションをとるかということが場を決定的に作るなと思っています。だから想定外のことが起きたときに、「想定外のことが起きた」と困る姿を見せると、やっぱり参加者の方は「困らせてしまっはいけない」というふうな思うので、「あまりそういうことをやらないようにしましょう」と配慮してくれるようになるなど。言ったときにファシリテーターがどういうリアクションをするかで、やっぱり変わっていくっていいか。

新崎 違うのよ。言ったって違う行動をしても、その枠組みの中で受け止めるよっていう、大きさのようなものを示してあげるのがファシリテーションかなとは思ってますけどね。

FJ そうですね。そう考えると僕のやり方って、子供たちの前で「いやいや、君たちの課題はどうでもよくて、俺は俺の課題を解決したいから手伝って欲しい」というスタンスなんですよ。

新崎 へえ、それ言うの？

FJ 言わないですけど、多分彼らの言っていることに対する評価っていうところに僕は興味をあまり持ってないの。それよりも自分のことの方が大きいから、これをやりたいから、ちょっと協力してというスタンスなんです。

新崎 それを子供らが感じるのかもしれないですね。やっぱり子供らも教員を見てるじゃないですか。

FJ そうなんです。嘘って絶対ばれると思うんですよ。

新崎 そうですね。どれだけうまく嘘をついたつもりでも、見抜く子ってきつきますよね。

FJ はい。なので正直に協力してほしいというスタンスで、しかもそれを僕は権力性を持ってやるんです。「この時間は協力する時間ですよ」という感じで。

新崎 あえて権力性を出すわけですか？

FJ その権力性もごまかさないうにしようというか。「みんなと一緒にだよ」みたいなスタンスで授業をしても「それは駄目だ」と言える権利を持っているわけなので。「俺は教室から出て行くことは拒否するぞ。その場で一緒に考えようぜ」という感じで無理やり考えさせるという(笑)

新崎 僕も、教育もソーシャルワーカーも、見えない権威性というのに気づくことだと思ってるんですよ。「一緒にじゃないか」といっても、一緒にじゃなくて評価するじゃないですか。

だから、常に自分自身はそういう意味での権威があるんだっていうことだけは謙虚に思っておこう。

でも外部の権威者が、権威を持ってやってくると、先生方は安心して子供らの状態を見れるのかなと、そんなふうにも思いました。先生が評価して、1人1人を見て受け止めるっていうのを全部一斉にやるのは限界があるので。

FJ 本当学校には先生しかいないのが.....やっぱり学校に行くと、やっぱりフラットでいることって、難しいなと思うんですよ。

新崎 どういうことですか？

FJ 自分に権力が一極集中している空間ってなかなかないじゃないですか。でも教室だと構造的にそうになっちゃう。そこでずっと毎日、日常的に過ごしてるのって本当に大変だなんて思うんです。そういう場所で、正常を保つって、アクティブラーニングのことを考えなくてはいけないのって本当に大変だと思えますね。

新崎 それは先生も生徒もどっちもね。

FJ 僕、1人でこないだ授業に行ったんですよ。今までは2人で行くことが基本だったんですけど、1人で授業をするということをやったときに、教壇の前から立て、子供たちに見られて何かを期待されて、そうしたらやっぱり何か教えてしまったんです、その授業で。そのときに「怖い」と思って。

新崎 そう思えるFJさん素敵やなと思いますね。

FJ でもそれは僕が普段圧倒的に日常で生きてるからだと思えます。教室がやっぱり非日常的な場。

新崎 これがずっと続いたら当たり前になるかもしれない？

FJ そうですね。

新崎 教壇の上に乗っていて、見られているという構造だと、こ
喋りたくなる。だからグループワークとかを取り入れるんです。

▶ 演劇と教育に関わる人として

FJ 「子供のために」とか考え出すと、変になるような気はしま
す。自分を勘定に入れないで「人のために」って、なかなか難し
いんじゃないかなと思うんです。あんまり自分をなくさないよう
に、自分の欲望でというか。自分の興味を教室で隠さないように
した方が、いいなと思います。「子供のために」というお題目で
何か権力性を発揮したくなったりということを私はしてきたので。
新崎 してないでしょ?(笑)

FJ いや、してきたんです(笑)

新崎 僕はやっぱり、「なんだろう」って考え続けることがす
ぐ必要だと思ってます。「分からないことが恥ずかしいこと
じゃなくて、分かろうとしないことが恥ずかしい」って自分でも
思うようにしています。分からないことっていっぱいあるし、分
からないってなった時に「ごめんね、教えて」って言える勇氣。

今FJさんが言ったことと同じだと思うんですよ。人間って自分
の尺度とか価値観でしか生きてないじゃないですか。好き嫌い
とか合わせることはもちろんできるけど、そんなときに「分から
ないことがいけない」というよりは、自分自身がそれに対して、分
かろうと努力しているかとか、ちゃんと向き合っているかとか、
そういうことが僕はとても大事。

多分共通するのは「結果何ができたか」という評価が今は
ずっと言われてますけど、結果がうまくいかいかないかは、そ
のときの偶然もありますし、そのプロセスの中でちゃんと自分自
身は葛藤しているか。表現も、できなかったら落ち込むのも一つ
の学びだと思いますし、できるばかりということってなくて、
あのとき、ちょっと言えなかったなということで、次にもしか
たら変わるかもしれないという。なにかそういう意味での自分
の限界や価値観みたいなのを誠実に、持っておきたいなとい
うふうに思います。

▶ 若手ファシリテーターからの感想



R・Nさん

「その人なりの楽しみ方がある」というお話
が印象に残った。今までは子供たちが笑顔か
どうか、リアクションがあるかで様子を伺っ
ていたが、もっと別の視点を持ちたいと思っ
た。また、演劇WSを「楽しむ」意外にも様々
な関わり方があると思うので、そういったことも踏まえて、
今後はファシリテートに取り組もうと思う。



A・Nさん

自分の思いや、考えをそのまま伝えるという
ことは、普段自分自身が生活をしていても、
本当に難しいことだと思います。
特に「評価」が絡んでくる中で、伝えるべき
ことをきちんと伝えるという事は、とても難
しいですが、必要なことでもあると思います。

そのように、自分自身が考えていることを互いに伝え合
う場を「演劇」という方法を使ったり、ファシリテーター
として意識をしてみることで、作ることができるという事
はとても素敵な事だと思いました。



R・Iさん

ファシリテーターとしても、俳優としても、
「演じる」という事を改めて考える機会にな
りました。日常生活でできないことが「演
劇」を使うことでできるようになったり、少
し言い方ややり方を変えることでできるよう
になったりするという事が印象的でした。

これから、自分自身が演劇作品に向き合うときも、ファ
シリテーターとして子どもたちに向き合うときも、いろん
なことを意識していきたいです。



▶ 編集後記

「演劇的手法」を使うという事にどのような効果があるのか、何が変わるのか、というお声をよくいただきます。そんな中で「演劇
の場では〈私〉という主語で話すことができるのではないかと? そういう場で話すということ自体に意味があるのではないかと?」とい
うFJさんの考えに触れる機会がありました。そのお考えを聞いて「それってどういうこと? どういう思いからスタートしているの?」
と興味津々で沢山お話を聞きたいと思ったことが、この対談のきっかけです。

社会福祉士として、大学で教鞭をとったご経験もあり、さらには演劇のご経験もある新崎先生をお迎えし、お二人の演劇・教育・福
祉に関する思いを聞かせていただきました。

大変ボリュームのある内容になっておりますが、現代の教育現場や、社会問題、また個人個人の苦しさに対して〈私〉が何ができる
のか考えるきっかけになりました。新崎先生、F・ジャパンさん、貴重な機会をありがとうございました。

※本対談記録では、一部抜粋・編集を行っています。
※当対談記録の転載、複製、改変等は禁止いたします。

▶ 対談前編の動画が公開されています!

不易アカデミーHPにて、本対談前編の様子が動画で公開されています。
是非ご覧ください。

不易アカデミーHP : https://www.accd-c.org/fueki_academy/

動画はこちらから! →

